



話題の本棚

平野暁臣著『図説 万博の歴史 1851-1970』

菅原潤著『京都学派』

特集／恋愛

新刊コーナー／新書コーナー／名作を読む 『暗夜行路』／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/



UNIV. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

万博を振り返ってみよう

図説 万博の歴史

1851-1970

平野暁臣著

小学館クリエイティブ



二〇二〇年の東京オリンピックはそこまで近づき、最近は大阪万博誘致の話題が現れている。また今春からは一九七〇年に開催された大阪万博のシンボルである「太陽の塔」の内部が一般公開されるようになった。近い場所での万博の再開催が見込まれる今、その歴史を今一度振り返ってみたい。

現在では四年に一度開催される万国博覧会だが、当初はそれほど固定した間隔ではなかった。国力を示す機会が多い方がいい。産業革命から帝国主義へと向かう西欧諸国は万博において自国の発展を競って示そうとした。さて、そのような背景知識は置いておいて、ここで紹介したいのは図版で見る万博の様子である。

【シンボル】

万博にはシンボルとなる建物がある。日本人にとって一番身近な万博のシンボルといえば前述の「太陽の塔」だろう。もともと万博用の建造物は終了後には解体が前提だが、それを免れたものが今伝えられているのだ。

一八五一年のロンドンで産声を上げた万国博覧会。この万博にはクリスタル・パレスと呼ばれる鉄骨とガラスからなる会場が出現し、人々を驚嘆させた。今でこそ京都駅ビルのコンコースなどガラスを

用いた採光豊かな建物は珍しくないが、当時は一九世紀半ば。技術の粋を集め、外光をそのまま取り入れた建物は発展に沸くイギリスの栄光の象徴ともいえただろう。さて、それに競争心を刺激されたのが隣国フランス。一八八九年の万博開催の際に建てられたエッフェル塔はこちらも鉄骨からなる有名建造物である。石造りを基本とする従来の建造物の重厚さに対し、軽やかさを基調とした万博シンボルは最新技術の展示とも相まって、国力の誇示とともに近未来の展望という万博のテーマを表すものともいえる。現在から翻って見ればレトロ・フューチャーともいえる一種の懐かしさを覚えさせる図版の数々だが、当時はこれに将来の夢を見ていたのだ。

【パビリオン】

万博といえは各国の建てるパビリオンも独特である。この方式は一八六七年のパリ万博から始まった。人の分散を図る目的で採用されたところ、各国がそれぞれのお国柄を発揮する場となり万博の国際的な雰囲気を作り上げるのに一役買ったのである。帝国主義の時代にはそこで植民地先の産物や原住民が「展示」された。それは「進歩と野蛮」という西欧中心の進歩史観に則ったものだったが、当時の西欧人は、未知の人々の自分とは異なる暮らしをエキゾチックと捉えて大いに楽しんだことが本書の図から窺える。日本も芸者の生活を「展示」したという逸話も残っている。

近未来感もエキゾチックさも普段の生活では味わえない「非日常」の感覚だが、情報が発達し、未知のものもなくなってきたかに見える現在、万博に新たな「非日常」は作れるのだろうか。（ねこ）

（二五九頁 税込五一八四円 11月刊）

京都学派は何を遺したか

京都学派

菅原潤著
講談社現代新書



太平洋戦争終了後、まもなく京都大学の四人の学者が戦争協力者として公職追放の罪に認定された。京都学派のそのような点に注目する本書において、著者は彼らの時局的発言を「自文化礼賛主義」と捉え、さらにその考えを乗り越える導きの糸を上山春平の「ネガ（負）」に求める。そこにナショナリズムの新しい可能性が見られるというわけだ。では、それらはどんなものなのだろうか。

京都学派の「自文化礼賛主義」

本書は、京都学派の起こる以前から戦後の京都学派に到る流れを追った新書である。そして、著者が最も注目しているのが京都学派の戦争最中の時局的発言である。著者はそこに通底しているのが自文化礼賛主義だと言う。それは彼らの脱亜論的発言に表れており、例えば京都学派の一人である鈴木成高は以下のように述べている。『アジアの歴史というものは、非常に異質なのですね。……日本の歴史は案外に西洋と同質的でわかりやすい』。鈴木によれば日本は偶然にアジアに位置しており、西洋の方に近い関係にある。つまり、京都学派の発言は、日本がどのアジアの国よりも秀でており、西洋の近代国家の方にこそ類似しているという脱亜入欧論によって自文化を持ち上げた、自文化礼賛主義的発言と捉えることができる。

自文化礼賛主義ではない境地へ——上山春平の「ネガ（負）」

京都学派は、戦後一貫して以上のような発言に対して沈黙し、自らの哲学研究に従事するようになる。まるで彼らの時局的発言などなかったかのように。しかし、著者はその問題を受け継いで回収したのが上山春平であると言う。上山は、田辺元のもとで哲学を研究していたが後に徴兵。人間魚雷「回天」に搭乗するも事故で九死に一生を得る。しかし、自らのかけがえのない戦友を戦争によって亡くすことになる。そんな自らの経験を踏まえて上山は日本の文化をマイナス感情が詰まった「ネガ（負）」と定義つけた。

上山にとって日本は、無理やりに戦争を経験させられることによって、九死に一生を得、自らの友人を奪われた憤り、憎むべき祖国である。しかし、そんな誇るべきところがなく、憎むべき日本でも上山は肯定しようとする。『日本文化をネガ（負）の極致とみなす主張を、よるこびに近い感情を以て、是認する気持ちになっている』と言うのだ。かつての京都学派が自らの文化の反省すべきところには蓋をして礼賛すべきところばかりを必死に探していたのに対し、上山は自らの愚かさや過ちをまずは冷静に受け止めてから無条件に祖国を愛するという態度をとっていた。そして、京都学派を回収したような上山の「ネガ」に、著者は昨今の行き過ぎたナショナリズムを牽制する役割を重ね合わせる。つまり、自文化をまつりあげるのみではなく、物事を冷静に受け止め反省することから開ける新しいナショナリズムの境地へ。京都学派への関心を満たすだけでなく、ナショナリズムを再考できる一冊となっている。

(二七二頁 税込九七二円 2月刊)

〈特集〉

恋愛

道に迷ったらグーグルマップが頼りになる。調べ物は Wiki で済む？ でも、恋愛の教科書はうまく見つけられない。それもそのはず、多くの人たちがその問いにぶつかり、果てしない冒険をしてきたのです。互いの気持ちや容姿だけでなく、昨今の風潮にも翻弄される、私たちの混迷する恋愛情勢。いったん落ち着いて、その解決の糸口を読書を通じて探してみませんか。

(トロ)

(本を読んでいるときだけでも)恋がしたい

「今年こそ恋人を作る！」と宣言しては、友人から呆れられるのも何度目だろうか。クリスマスでもバレンタインデーでも何も起きることなく、春を迎えた。枯れた生活だけれど、気持ちだけでも恋愛のドキドキ感を楽しみたい。そう思った筆者は、引越しのとき

のまま放置されている段ボールを漁った。
恋愛はロマンのみにあらず

そして見つけたのが、嶽本野ばら著『恋愛の国のアリス』(朝日文庫)。乙女のカリスマと言っても過言ではない嶽本氏。そんな氏の恋愛論は、やはり深い。愛を向ける対象は、特定の「君」だけではない。カスタムドールやお気に入りのピアス、香水と、身の回りの素敵なものの描写からは、深い愛が伝わってくる。ロマンチックな気分浸ったところで、ふと我に返るような言葉も頻出する。「会社の面接に行く時、緊張するからお酒、飲みますか？ お友達に借金を申し込む時、恥ずかしいからって、酔っ払いますか？ 真剣に気持ちを伝えなければならぬ時に素面でないければならないという最低限のマナーは、恋愛に於いても守らなければならぬ筈です」。

恋愛に甘い気分だけ求めてはならない。現実

はもっと厳しいものだ。

恋愛は、夢見るだけでは実らない。実践あるのみ。そう意

気込んで書店に向かうと、一冊の本が目をつけた。森見登美彦著『恋文の技術』(ポプラ文庫)。京大生の冴えない生活を独自の筆致で綴る森見氏のことだ。彼だからこそユニークな指南が受けられるのではないか。そう期待してページをめくり、気づいた。この本は、ラブレター執筆の指南書ではない。書簡体小説だ。

京都大学から能登平島の研究所に送り込まれた「俺」こと守田一郎。文通の腕を磨くせっかくの機会と、京都時代のさまざまな知人と文通しようとする手紙の文面から、登場人物の恋心が次第に明らかになってくる。しかし、身近な「京大」を舞台にしているからこそ、現実の自分の学生生活との明暗が浮き彫りになる。こんな素敵な京大は、どこか別の世界線に存在していると思えない。

……気を取り直して、アルティシア著『オ



クテ女子のための恋愛基礎講座』(幻冬舎文庫)を手にとった。元・喪女(モテない女性)であったというだけあって、アドバイスも具体的にあり、説得力抜群の一冊だ。例えば喪女からの卒業の仕方や、女子間では一般的でもついつい男性を引かせてしまう受け答えなどが、折々にアニメやマンガのネタを挟みながら、オタク女子特有の妙なハイテンションで解説されている。いくらオクテだからといって受け身ではせっかくのチャンスを逃してしまふ! そんな積極性に溢れた文体や、酸いも甘いも噛分けた著者のアドバイスには、こちらもう力づけられる。

モテない系という生き方

しかし、恋愛テクニクに関する本をむさぼり読んでみると、恋愛したいのかモテたいのか、よくわからなくなってくる。

能町みね子著『くすぶれ! モテない系』(文春文庫)は、そんな血迷った気分にも染みる一冊だ。「モテない系」とは、実際のところ恋人がいるかどうかは関係なく、濃密にモテないオウラを発散している人々のことだ。モテるために何か

をすることにものすごく抵抗がある。

モテ系の子にちょっと憧れている割



に、見下してみたりもする。一風変わった服装に凝っていたり、マイナーな趣味に没頭していたりする面もある。架空の異性のプロフィールを設定して、友達に公表するのを楽しんでいたりする。表紙絵のどくだみのように、モテない系は華やかではなくとも滋味深い存在のようだ。

二〇〇六年からの連載ゆえ「ミクシィやブログのプロフィール欄に好きなものを延々と書き連ねるのが大好き」など多少ネタが古い。

我らモテない男たち

われら寂しい男子にも、どうやら女の子も素敵な恋を求めているというのは妄想ではないことがわかった。いや、そんなことには常日頃動づいているけれど、片や僕らの前には友達や顔見知りから恋人への跳躍をためらわせ、多くの場合には絶望させてしまふ壁が存在している。その壁を象徴する残酷な言葉、それが「ただしいケメンに限る」だ。

モテない自分を直視しよう

この言葉はある程度真実だろうが、一方で僕たちより容姿も悪くて頭もバカ、そんな男が恋人と仲睦まじく歩いていることも普通に

しかし、自虐しつつも誇り高さを保つモテないのメンタリティは、いまま古びていないように見える。恋愛のことも気にするけれど、モテより内輪ノリで盛り上がりたてしまふモテない系。ちょっと残念感があるけれど、なんだか楽しそう。こんな恋愛の楽しみ方もアリなのではないだろうか。とりあえず、架空の彼女の設定を妄想するところから始めようと思う。同好の士を求めます。

(投稿・のし梅)

ある。出会いの運のなさを能動的に補い、こちら側の男になるために、「モテ」のバイブル『すべてはモテるためである』(文庫ぎんが堂)が役に立つはずだ。「なぜモテないか」というと、それはあなたがキモチワルいからでしょう」の一言で始まる本書は、巷の恋愛テクニクを紹介する本とは一線を画す。男

たちを「モテなさ」の根源へ導く一冊だからだ。キモチワルい男の容赦ない総覧として始まり、半ば



まで読めば、必ずどこかに自分が発見される。現実を突きつけられ、あまりのことに多少気分が悪くなるかもしれないが、これも自己改善のためと我慢してほしい。後半では、そんなキモチワルい僕たちに残された手段について、しっかりと語られる。

そもそもなぜモテたいのか、という問いに至るには、猛烈に苦しい過程ではあるが自分が多少なりともキモチワルいと知ることが必要らしい。そう考えてみれば、本書は非常に親切な本でもある。モテない男だった著者が、僕たちの代わりにキモチワルい自分を掘り下げ、開示し、改善案を提示してくれているのだ。その筆致も、寂しい男たちへの愛情に溢れている。五章、モテない男こそが一際他者を愛する力を持ちうるという項などでは、僕は号泣した。読者への愛と含蓄ある初学の書として、本書は必読だ。

告白のコツは動物に学ぶ

気持ち悪さの自覚を得ても、女の子が勝手に告白してくれてくれるはずもない。慣れるはずもない行為だけれど、告白というものをしなくてはならない。身に覚えがある諸兄もいるだろうが、そういうときに最も気持ち悪くなるのが非モテだ。告白に臨む姿勢は、動物から学ぶのはどうだろうか。『恋するいきもの図鑑』(カンゼン)が、そんな需要を満た

してくれるはずだ。肉食系メスがいたり、浮気が当たり前になっている種も散見されるが、あま



り参考にはいけない。本誌十月号の表紙も飾ったハシビロコウのごとく、丁寧にかわいらしく、素直におじぎでもしながら告白するのが肝要なのではないだろうか。自意識に惑わされない、動物たちの恋愛が眩しい。

僕たちの恋愛

恋の為に見つめなおした自分の、なげなしの勇気が幸運な結果をもたらしたとしても、いつかは別れが来るのも恋愛だ。現代のどこにでもあり得る、小説より奇ではなくとも、小説より悲痛な別れを描いた『ボクたちはみんな大人になれなかった』(新潮社)を読んではいい。美しくはない「彼女」に会った

何で一人しか愛しちゃいけないの

恋はするものではなく、落ちるものである。計画的に人を好きになることは出来ず、人間は無数の出会いの中で、恋の落とし穴に嵌まってしまふ。突然始まる恋愛が甘いとは限ら

とですべてを愛えられてしまふことは、出会いの数少ない我らモテない男たちにとって、とりわけ他人事ではないはずだ。「自分より好きな人」との別離が生む喪失が、別れの後すらSNSで繋がれてしまふことにより更に深まる、そんな時代に非モテの男として僕たちは生きることになった。それはもしかすると、今を生きる男として幸福なのかもしれない、そう思わせる魅力がこの物語にはある。うまく恋愛をできずにあがき、女性を前にしては自意識に翻弄され、ひと時の出会いには全存在を揺るがされる、モテない男たち。恋に落ちる度味わう苦悩の濃度だけならば、僕たちは誰にも負けることがないはずだ。苦悩の嵩が即ち、他者への優しさや配慮につながるわけではないけれど、青春をモテない男の旗印のもと堂々と生きた先には、他には代えがたい出会いが待っているだろう。(トロ)

ない。嫉妬や束縛、不倫に三角関係、親しかった関係性は捻じれ、時にあなたは大切な居場所を無くしてしまふ。……しかしこう考えてみたことはないだろうか。「何で一人しか

愛しちゃいけないの」と……。

愛の形に常識なんていらぬ

三角関係から始まる人間の争いは物語の定番だ。しかし江國香織著『きらきらひかる』（新潮文庫）は、そんな三角関係が奇妙に共存していく物語である。

主人公の笑子と睦月は、双方腰に傷を持った夫婦だ。笑子は軽度の躁鬱病を患



い、睦月は男しか愛せない性格だった。笑子は性交渉をしなくても睦月が好きで、そして睦月の恋人（紺）との関係も認めていた。

ゲイの彼とその恋人も大好きだった笑子は、「ずっとこのままである」ことを望んでいた。しかし調和した三角関係は、常識に追い詰められていく。両親に「子供はまたか」と迫られ、父に「男の恋人とは別れさせろ」と命令される。夫婦は好きな人を好きでいたいだけなのに、素直に生きていたら友達を失い、両親と疎遠になってしまう。それでも夫婦は自分らしさを手放さなかった。世間や常識に追われながらも、自分たちの愛を守る家族は、「普通」に縛られる社会の中で、小さな希望のように輝く。

ポリアモリーをしていますか

相手を縛らない恋愛、複数の人を同時に愛

する人は、どういう心境なのだろうか。深見菊絵著『ポリアモリー 複数の愛を生きる』（平凡社新書）は、近年拡大している複数恋愛（ポリアモリー）をまとめた良書である。誤解されがちな不倫やフリーセックスと違い、ポリアモリーが倫理的で道徳的な恋愛関係であることを教えてくれる。

ポリアモリーとは△対一▽の恋愛であるモノガミーとは違い、複数の人を同時に愛する恋愛の形だ。本書では公開性や合意などの原則、ポリアモリーが生まれた歴史や近年の運動、影響を与えたSF文学等も記述している。また実際にポリアモリーを実践している人々へのフィールドワークからは、この恋愛の奥行が見えてくる。

ポリアモリーを公言している人でも嫉妬という感情を免れない。時に愛する人が他の恋人へ行ってしまう疎外感、自分が置いていかれる孤独感をもつ。しかし彼らは所有を否定する。愛とは独占するものではなく、束縛するものでもない。人を同時に好きになることは自然なことであり、相手にもその感情を認める。ポリアモリーがつくる関係性をみていくと、この恋愛の形が性癖ではなく、考え方の一つなのだ



と思えてくる。

愛と性は同じなの

最後に紹介したのはマンガ、新田章著『あそびあい』（講談社）だ。誰とでも寝てしまう女子高生小谷と、彼女を好きになった同級生山下との恋愛物語。一対一の恋愛関係を望む山下が、性に奔放な小谷に翻弄されていく。

小谷は誰とでもセックスすることに罪悪感がない。彼女にとって食欲と性欲は似たようなもので、快楽を逃すのは「もったいない」のだ。性と愛を同様と見なさず、愛している人としてセックスをしないという思考が分らない。

本書の魅力はそんな彼女を必死に愛する山下の葛藤だ。「山下は私を愛えたいんだね」「今の私が嫌いなんだね」と言われた彼は、体で繋がれるのに、心で繋がれない寂しさを抱える。恋愛に多様な形式があるならば、違う形式の人を愛するのは難しい。そんな困惑によって、道徳や常識を押し付けようとする思考が生まれてくる。

モテない男女に悩みがあるように、モテる男女にも悩みが付きまとう。恋愛の在り方に正解はない。だからこそ自分らしい愛の在り方を、悩みなが探してみては。（きもの）

新刊コーナー

ウルフ・ボーイズ

二人のアメリカ人少年とメキシコで最も危険な麻薬カルテル

ダン・スレーター著
堀江里美訳 青土社



米墨国境の町、テキサス州ラレドに生まれたアメリカ人少年二人は、メキシコ麻薬カルテルの青年暗殺者だった。綿密な取材と獄中インタビューにもとづき、カルテル同士の終わりなき権力闘争と米側の密輸取り締まりの応酬する麻薬戦争の当事者の姿を、本書『ウルフ・ボーイズ』は活写している。

特殊空挺部隊を起源とするマフィア、ロス・セタスでの、繰り返される仕事の果てに殺人への依存をきたし始めるバート。それに對し、仕事をこなすたび「できる男」としての自覚を深め、時に暗殺者、時に普通のティーンエイジャーとして女の子とデートするガブリエルの歪な役柄は、「史上最も厄介な戦争」と著者の呼ぶ無間地獄にふさわしい。

彼を捕らえることになる、戦争終結への絶望を抱えた捜査官ロバートと、ロバートをあ

ざ笑うガブリエルのドラマチックですらある対決はこの戦争の縮図にもなっている。ロバートが捜査にどれだけの努力を払おうと、貧しい辺境の街からは、次々と組織の弾丸になる、ガブリエルのような若者が放たれる。その絶望は、あまりに大きな構造を前にした当事者すべての行動に滲み出るようだ。

トランプの「壁」発言が物議を醸したアメリカで映画化される本書が、本国でどのような反響を得るのかは未知数だ。ただ、今も続く最悪の闘争の一つとして、知っておくべきことが濃縮された一冊であることは保証したい。

(四〇五頁 税込二五九二円 2月刊)

デリヘルドライバー

東良美季著
駒草出版



風俗、と一口に言っても様々な形態がある。最も有名なものは雄琴や飛田新地に代表される店舗型風俗であるソープランドだろうが、それとは対照的に店を構えない形態もある。それがデリバリーヘルス、通称デリヘルと呼

ばれるものである。これは、風俗嬢を客の待つ自宅やホテルなどに派遣し、そこで性サービスを行うものである。この派遣役を務めるのがデリヘルドライバーという職業だ。

本書はデリヘルドライバーの職に就いた九人の男に行ったインタビュー集である。彼らの前職は様々である。ホストやヤクザなどデリヘルに近い「夜」の世界に生きていた者もいれば、バイオリニストやコックなど「昼」の世界にいた者もいる。いずれにせよ、歯車が狂い始めた運命に乗せられ、様々な職を経て、最終的に経歴や素性を一切問わずに即日採用されるデリヘルドライバーという、いわば最後の砦へ至る彼ら。その彼らから本書を通じて等しく伝わってくるのは、そのようにうらぶれてゆく中で、常にその時々々の職とにかくく身を捧げ必死に生きようとする姿である。勿論その中には、違法な職のような決して褒められざるものもある。だがその「夜の闇」に包まれた不格好な生き様のひたむきさには、「昼の光」のうちに微睡みがちな私たちの現実を揺さぶる「光」が漲っている。

男たちの欲望に満たされた夜の街で、確かな現実感覚を唯一保ちつつ車を走らせるデリヘルドライバー。闇を裂く彼らが放つ「夜の光」に是非目を向けてほしい。(投稿・海)

(二八三頁 税込二六二〇円 12月刊)

日本現代怪異事典

朝里樹著
笠間書院

心霊スポット、学

校の怪談。これらは
全て非科学的な噂
話の産物でしか
ないものである。しか

し、この手の話は、高度に発達した現代社会
にありながらも、年々尾ひれがついて増えて
きている。それは我々の恐怖などから来る想
像力に起因している。人の想像力はやむこと
を知らないほど膨大であり、怪異もそれに合
わせて増えているというわけだ。そして、怪
異はまた新たな怪異を産みだす。本書は読者
の想像力をも刺激する。

本書は一〇九二項目の怪異を収めた事典で
あり、その大きな特徴はユニークな索引にあ
る。五十音順は当然として、類似怪異、出没
場所、さらに使用凶器、都道府県別の索引ま
で付いている。このなかでも注目したいのが、
出没場所の項目に高速道路が多いことだ。

「ターボババア」は高速道路で走る車を四つ
ん這いで追いかけて追いつくと横にびったり
並走してくるというもの。また、「ダッシュ

ババア」というのもいて、こちらは走ってい
る車を高速で追い抜いていく。よく考えてみ
ると高速道路は人智を超えたスピードが繰り
広げられ、畏怖の対象となってもおかしくな
い場である。そんな恐怖から人間の想像力は
刺激されて怪異は産まれていく……。

索引の一項目だけに注目してもこれだけの
情報がつまっている。怪異への興味だけでな
く、現代社会の恐怖に起因する想像力の軌跡
を追いたいという人にもおすすすめ。そして、
本書に刺激され、読者のあなたも新たな怪異
を産みだすかもしれない。(ついうろ)

(五〇〇頁 税込三三六円 1月刊)

霊魂の不滅か死者の復活か
新約聖書の証言からオスカ・クルマン 著
岸千年・間垣洋助訳 日本キリスト教団出版局

人は死んだらど
うなるのか。古来
から人間を悩ませ
続けてきたこの大
問題に、本書はプ

ロテスタント神学の立場から明快に解答を与
える。手掛りとなるのは無論「聖書のみ」だ。
クルマンが問題とするのは、キリスト教の

説く死後生を「霊魂の不滅」とする、キリス
ト者自身にもみられる誤解である。それはキ
リスト教と混同されたギリシア的信仰にほか
ならない。プラトンの『パイドン』において
ソクラテスは「魂の身体からの分離」として
の死を説き、悠然と毒杯を仰いだ。対照的に
イエスは恐れおののき、激しく泣き叫びなが
ら死んでいったのである。

新約聖書の証言によれば、死とはひとりの
人間の生命全体の破壊である。しかし、人間
の罪の報いとしての死は、イエス・キリスト
が自ら死んで罪を贖ったことによって征服さ
れた。イエスが魂と身体を備えて復活を遂げ
たように、「終わりの時」には聖霊に満たさ
れた人間が「霊のからだ」として復活するこ
とが待ちのぞまれる。復活の時代はすでに始
まっている。しかし、いまだ完結していない。
この「中間の時」において、いのちの力であ
る聖霊が宿った人物は、たとえ死者であって
も、キリストに近づいているのである。

本書は一九五五年に行われた講演録であり、
当時「霊魂の不滅」を信じる多くの人々――
それを公の教説とするカトリックは言うに及
ばず――から反対や抗議を受けたという。い
まだ「中間の時」である現代においても、死
生観を問い直す一助となる一冊だ。(霊人)

(八五頁 税込二二九六円 12月刊)

消費資本主義！

ジェフリー・ミラー著
片岡宏仁訳 勁草書房

人はしばしば、

必要もなく割高な

商品を買ってしまう。

車や服、食品

でも、同種の安価

なもの数十倍以上高価な商品は珍しくない。

その上、高級商品が燃費などの面でかえって

不便で信頼性が低いことすらある。本書は、

そうした消費行動を「見せびらかし消費」と

捉え、進化心理学を用いて追究する。

なぜ見せびらかし消費を行うのか。「ヒト

は、個体間の配偶者獲得競争を通じ、生存・

繁殖の能力（適応度）を他の個体に見せつけ

るよう進化してきたから」と著者は答える。

雄ジャクの羽が代表例だが、動物は生存に

不利な形態・行動を備えることで、自らの適

応度を見せつけるよう進化することがある。

美しく巨大な羽を弱い雄ジャクが持てば、

雌の前に現れることなく捕食される可能性が

高い。生存に不利な特徴は、その個体の適応

度を示し配偶者を勝ち取るためのシグナルと

なる。ヒトの見せびらかし消費も、同じよう

に身につけられた性質だと著者はいう。

では、人は消費を通じていかなる性質を見せびらかしているのか。それは、一般知性と五つの性格因子だという。それらは今や、IQテストと性格診断で安価かつ正確に測れる。にもかかわらず、人は膨大なお金と時間を費やして学力や人間性を見せびらかしているのだと、豊富な例とともに本書は述べる。

本書の主張は不愉快に感じられるかもしれないが、人間や社会についての見方を揺さぶり、別の光景を見せてくれる本である。

(投稿・ひい)

(四七四頁 税込三七八〇円 12月刊)

ことばはフラフラ変わる

黒田龍之助著

白水社



ことばは、時と

ともに、枝分かれ

しながら変わって

いく。英語とドイ

ツ語、さらに遡れ

ばインドのサンスクリット語も同じ言語から

生まれたと考えられている。その名残で、英

語とドイツ語にはthとdの規則的な対応があ

る(例えば th |と d は t と d)。こうしたことばの変化を分析するのが比較言語学という学問である。本書はこの比較言語学という名で行われた大学の講義を再現したものである。しかし本書は先述したような比較言語学の内容を扱っているけれども、普通の大学の講義を期待して読み始めると面食らうことだろう。

そもそも著者はスラヴ語学が専門で比較言語学の専門家ではない。「ソシニールは自分で読んでください」などと言いつつ、読者を驚愕と不安のどん底に突き落とすこともしばしばである。しかしこうした表明は、著者の無責任さではなく戦略の表れと見るべきだろう。著者は権威に縛られて物事を考えることを嫌悪しており、学生に自由な思考を求めているのだが、講義には先生と生徒がいて、ふつう先生は権威ある立場である。それゆえ著者は自らが非専門人であると表明することで、先生としての権威を排除しようとしているのだろう。こうしたやり方は、講義というよりも、ソクラテスの問答を思い起こさせる。

比較言語学という分野自体の面白さ、そして「おやまあ」「ハイさようなら」のような軽妙な語り口も相俟って、本書は単なる上からの知識の伝達ではない、独特の魅力を持つ本書になっている。

(二三三頁 税込二二七六円 1月刊)

新哲学対話

ソクラテスならどう考える？

飯田隆著

筑摩書房

主人公ソクラテ

ス、そう聞くとギ

リシャの有名な哲

学者の対話の新訳

版かと思うかもし

れないがそうではない。本書は著者の想像に

よるソクラテスの架空対話本である。

ワインの味の良し悪しに始まる話題が自分

や他人の価値基準へと進む。さらにA—(

と人間の差異についての話や知ることについ

ての矛盾など、ソクラテスを囲み彼の知人ア

リストファネスやアガトン、テオドロスたち

が論を紡いでいく。「ソクラテスは日常の言

葉を離れないようにしていたのではないか」

という著者の言葉が反映された本書の話題は

現代の日常に通じている。著者の専門分野、

ウィトゲンシュタインの考察を踏まえた第三

章のテーマも実は、自分の考えや言葉が他人

に通じないなど日常において遭遇する可能性

のある問題でもある。

さて、本書の中で出された問題に答えはあ

るのか？ たゞは価値基準。自分の基準と

新哲学
対話

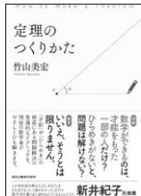
飯田隆

筑摩書房

定理のつくりかた

竹山美宏著

森北出版



高校から大学に
進学して気づくの
は、研究というも
のの存在感である。
講義をしているの
は基本的に研究者であり、また自分も卒業論
文を書くという形でそれに参加することにな
る。しかし、講義を受けているだけではな

他人の基準とは異なる。それは既知の答えか
もしれないが、ならばそれらの基準を統合す
ることは出来るのだろうか？ 答えの先にさ
らに問いは続く。こうしてみると哲学とは答
えの出ない学といえるかもしれない。

冒頭で述べたように本書は架空の対話本。

こんな対話をソクラテスは実際にしただろう

か？ もともとソクラテスは自身では言説を

残さなかった。現存する彼の言葉や主張は弟

子たちが対話篇という形で輪郭づけたものだ

ったのだ。だとすれば本書もソクラテスの対

話といえるのかもしれない。

(三二八頁 税込二四八四円 11月刊)

(ねこ)

なかその実情は見えてこない。こうした事情

はどの分野でもそうだろうが、特に研究のや

り方が想像しづらいのが数学である。おおよ

そ教わるのはすでに完成された理論であり、

それがどのようにして構築されたのかは分か

らない。一体、数学を研究するとはどういう

ことなのだろうか。

数学における研究、すなわち新しい定理の

発見が行われる過程を疑似体験できる本書は、

こうした疑問に答える一冊である。数学者の

仕事について紹介した書物はほかにもあるが、

ある種のチュートリアルのように読めるとい

う点が本書の特色である。まず、数学者が研

究を進める際の大まかな流れと常套手段が紹

介されたのち、読者は具体的に定理の予想か

ら証明までを実際に体験してみることになる。

具体例の計算に始まり、証明の清書に至るま

でのプロセスはいかにも泥臭く、数学と聞い

てまずイメージされるものとはかなり異なる。

それは決してひらめき一つで完成されるもの

ではないのだ。登場する数学はおおよそ中学

程度のもので、おそらく難なく読み進めるこ

とができるはずだ。

本書は数学を学ぶ際に参考になるのみなら

ず、謎と思われがちな数学者の仕事について

の興味も満たしてくれるだろう。(藤餅)

(二二六頁 税込二二六〇円 2月刊)

「愛の時代」のドイツ文学

菅利恵著
彩流社

時は一八世紀。

ドイツ語圏における啓蒙の時代は、恋愛や友情といった私的な愛の領域

にとりわけ価値がおかれた「愛の時代」でもあった。私的な愛は、いわば嵐をしのぐシェルターだった——絶対的な權威が失われた時代にあって、確固としたアイデンティティを築くことができない不安という嵐を。



「愛の時代」の文学が描き出した愛はきわめて個人的な感情の発露でありながらも、「自然」な人間性という普遍的なものに自己を接続させるものであった。しかし「自然」なあり方は、それからはずれる人にとっては強制的な規範となる。たとえばレッシングの戯曲『エミリア・ガロット』の主人公エミリアは、「自然」な道徳に適合できずみずから死を選んだ。個人的なものから普遍的なものへいたる回路が機能するためには、「自然」ではないものの徹底的な排除が不可欠なのだ。この愛と排除の論理は、「愛の時

代」につづくナシヨナリズムの時代の底流をなしている。シラーやレンツを巧みに引用しつつ明快な主張を打ち出す著者の手法は見事で、本書はドイツ文学やナシヨナリズム論の初学者にもわかりやすいものとなっている。ところで、「愛の時代」を吹き荒れた嵐はおそらく現代もわれわれの心をざわつかせている。そして、それに採まれたあけく「外部」と自分とを隔てる風よけを作りあげてしまつことも、なにも当時に限ったことではない。「愛の時代」から現代を透かし見て、考えてみるのはいかがだろうか。(ミセ)

(二九八頁 税込三三〇四円 2月刊)

憎しみに抗って

カロリン・エムケ著
浅井晶子訳 みすず書房



時は現代、二一世紀。人種差別や性差別、宗教による差別——漠然と区分された集団への憎しみが跋扈する時代。人びとが公然と憎しみを表明してはならず、差別的表現が多くの賛同を得ることすらある時代。現代は

「憎しみの時代」とでもいったところか。

本書は、ドイツのジャーナリストである著者エムケが、主として難民への憎しみの感情についてさまざまな現代思想家の言葉をひきながら論じたものである。このような憎しみの根本にあるのは、われわれと他者とを区別する境界線だ。恣意的な枠組みの内部が「均一—自然—純粹」なドイツ人だとされる一方、その外部にいる難民たちは憎しみの対象となる。このような他者排除の論理に對抗し、エムケは「不純なもの」を積極的に肯定する。

フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーいわく、「我々」とは「私」の加算でも並列でもない。だれもが普遍的な「我々」に属しながらそれぞれが異なった存在であり、この差異にこそ目を向けるべきなのだ。社会における複数は個々の生き方の自由を保障する。だからこそ、自分でいられる場としての社会への帰属意識はかえって強まるのではないかと、エムケは提言する。

単独でありながら複数であるという生き方を引き受けたさきには、どのようなわたしが、そして時代があらわれるのだろうか。そこには、自分とちがう人間を憎むのではない、あたらしい「不純な」愛のかたちがあるのに見えてくるかもしれない。(ミセ)

(二二六頁 税込三八八八円 3月刊)

蒙古襲来と神風

中世の対外戦争の真実

服部英雄著 中公新書

本書『蒙古襲来と神風』を一読して評者は長嘆息した。新書がどこまで学術性を持ちうるかについての勘違い——畢竟新書を「舐めていた」ことに気がかされたからである。

文永の役には「神風がなかった」のはもう定説の感があるが、本書はなんと弘安の役も勝敗を決したのは神風ではなく、博多湾や肥前鷹島など沿海・島嶼の地上戦であったとする。モンゴル史的観点とも異なる戦史研究的な視角は、戦前からの先行研究を切り捨てての快刀乱麻の叙述と相俟って読者を引き付ける。

斬新な叙述を可能にするのは著者のキャリアである。九州大学名誉教授の文献史家・服部英雄の前職は文化庁調査官。『蒙古襲来絵詞』の絵と詞書双方を緻密に読み解き、史跡や遺跡・遺物のチェックも怠らない。学際性と実証性の両立はついに「神風」用語集の近代史の欄へおしやるかもしれない。

中世史や九州史への関心のみなならず、たかぎ七彦著『アンゴルモア』（角川書店）の予習にも薦めたい。日本中世史ブームのこれかを占う注目の一冊。

（二四六頁 税込九二九円 11月刊）

ジョンレンはなぜ神を信じなかったのか ロックとキリスト教

島田裕巳著 イースト新書

あまり意識されることの少ないロックとキリスト教の関係を書名な宗教学者が説き明かす。主な話題は、エルヴィス・プレスリーのゴスペルの側面や、ユダヤ人ポップ・ディランのキリスト教への改宗の消息、ビートルズのメンバーの宗教への関心の在処などである。彼らの膨大な楽曲を取捨選択し、その宗教性を分析する手捌きは、やや恣意的に感じられなくもないが、参考となる箇所も多々ある。

あらためて気づかされたのは、数多くのミュージシャンが幼少期に教会でキリスト教と音楽活動に親しみ、ロックスターとなってプレッシャーから薬物や酒に溺れるような精神的危機に陥った際に、信仰が新たにされる回心を経て、立ち直っていった事実である。かくしてロックはキリスト教化を遂げていく。

信仰が前面に出たジャンルであるContemporary Christian Musicについても言及があるが、それが米国外には広まらないという指摘は幾分疑問である。たとえばK-popファンの評者には、K-popとも浅からぬ関係をもつ韓国でのCCM人気は見逃せないであろう。（霊人）

（二五六頁 税込九三〇円 2月刊）

統計ソフト「R」超入門

実例で学ぶ初めてのデータ解析

逸見功著 講談社ブルーバックス

文理を問わず、データの分析を行う機会意外と多い。その際は統計処理ソフトを用いることとなるが、データ数が多いとExcelでは力不足、かといって本格的なソフトは敷居が高く、手軽な選択肢は少ない。

データを実際に分析してみることで統計処理の方法を解説する本書は、データ分析を始めたい人に最適な一冊である。本書で紹介されるRコマンドは統計処理ソフトとして定評のあるRを使いやすくするためのGUIであり、無料なこともあって統計処理を行う際の選択肢として有力である。内容はインストールから様々な統計手法の適用に至るまで、豊富である。実際の研究に基づくデータを題材としており、また紹介される解析手法には必ずその用法の解説がついているため、具体的にどうすればよいのかがわかりやすい。新書版で持ち運びやすく、安価な点もうれしい。統計に関する初歩的な知識はあったほうが読みやすい。また、統計手法の詳細までは説明されないで、他の書籍で適宜補いながら読み進めるとよいだろう。

（二九〇頁 税込二三八二円 2月刊）

自分、このどうにもならない存在を生きる



「小説の神様」の手になる「日本近代文学の最高峰」である。地味で小難しいイメージで敬遠したかもしれない。初めての人も、再読の人も、せっかくの学生時代、そこに本があるなら読んで方がいい。それでは、あいやこおろ。不思議に妙な響きに誘われて。

序詞につづく四部構成の本作、それぞれ違う土地で展開される各章のあらずじを辿ろう。いつの世も鬱屈した若者の本質が数々の印象的な挿話とともに定着され、読者との出会いを待っているはずだ。

▼止まない雨（東京） 序詞は不気味な通奏低音の役割を果たす主人公の追憶である。母を亡くした六歳の時に突然祖父に引きとられて嫌だったこと、あるいは父への反感と母への思慕がつづられる。

主人公は小説家の時任謙作。縁談の破綻や父との不和から不愉快を増幅させ、うちつづく秋雨の中、それを酒と女で癒らす日々を送るが、やがて肉慾と自制心の葛藤をただすべくひとり尾道に発つ。

▼乳房の質量（尾道） 平安を回復しつつあった謙作は、東京の祖父宅で幼少時から一緒に住んでいた女中のお栄との結婚を願う。彼女はかつて祖父の妾だった人で、謙作より二〇も年上であったが、懐かしく恋しくなったのである。だがそれを兄への手紙で申し出ると拒否され、出生の秘密——父の不在中に祖父と母の間にできた子であること——を明かされる。心身は乱調し、乳房をもてあそぶことだけが空虚を満たしてくれるような空虚な日々が再来する。

▼運命の悪意（京都） 京都という風土においては「初めていくらか救われた気持になった。鴨川を散歩しながら見染めた女性と結

婚、子供も誕生し「本統の生活」が始まったと思われたが……。

▼赦されの時（大山） 妻の過ちを知る。謙作の留守中に従兄と一夜をともにしていた。悩みおののく彼はとうとう意を決し、またひとり今度は大山へ旅立つ。星月夜の山の中腹で大自然に溶け込むような陶醉を覚えるくだりの描写は、彫琢をきわめてなるほど白眉だ。この妻みはあまりにじわじわと感得されるもので、こんな文章はなかなかない。そして、下山した謙作が熱にうなされ、京都から見舞いに急行した妻と赦しあう情景をもって小説は完結する。

*

書き始めてから二六年後の一九三七年、ようやくの脱稿の場となった直哉旧居の書齋を、晩春の奈良に訪ねた。六畳の和室に小さな文机、窓外には屋根瓦と緑が美しく、文体そのままの清潔さだ。思えば、暗夜の光も自然との一体化も凡庸な比喻にすぎぬ、病床で救すのもいかなるものか、といった批判はありえよう。だが、赦しあうために彼らがどれほど「私」を置いて生きねばならなかったか、この事実の迫真性に評者はうちのめされたものだ。和解とは妥協でも欺瞞でもなく、それぞれが運命として与えられたどうにもならない己の存在をつよく、それでもつよく生きた末にふと舞い降りる、きつと愛の名前であるだろう。——暗夜行路。かみしめるように呟いた。あたかも、お前を生きよ、という風のきらめきが聴かれた。

*

▲読書案内 テクストの表層と戯れる連貫重彦『「私小説」を読む』（講談社文芸文庫）は瞠目すべき批評。阿川弘之『志賀直哉（上・下）』（新潮文庫・品切れ）は弟子による緻密な評伝。（春海）

世界大戦が残した罪と償い

向き合えない過去、忘却したい思い出、治らない傷。トラウマは人の記憶だけでなく、国の歴史にも存在する。囚われの過去から自由になりたい欲望と、もう思い出したくない苦悩。戦争の過ちを直視するのに、一体どれだけの歳月が必要なのだろうか……

英雄と呼ばれた罪人

戦勝国の罪を指摘することは難しく、今もアメリカでは原爆の悲劇的な展示には批判が殺到してしまふ。原爆投下は戦争終結を早めたという英雄的な語り口で記憶されるのだ。……しかし読者は知っているだろうか。当時広島上空で原爆投下を指示したクロード・イザリーの名を。彼は帰国後罪の意識に苛まれ、苦悩の中で反核運動に償いを見出したことを。

往復書簡『ヒロシマ わが罪と罰』(ちくま文庫、絶版)にはイザリーの葛藤が

彼の言葉で載せられている。

彼は帰国後自分の犯した罪に気づき、必死でその記憶を忘れようと奮闘した。



アルコールに溺れ、精神病院に入院し、自殺未遂を行い、小切手を偽造して広島島の孤児に送金した。しかし何をしても目を瞑れば広島島の光景が蘇り、人々に英雄と呼ばれながらも償いの道を探していた本書はどのように苦しむイザリーに、哲学者アンデルスが手紙を送るところから始まる。往復書簡で結ばれる対話の繋がりから、イザリーは反原爆運動に救いの道を求めていった。しかしそれはアメリカにとって、原爆の罪を糾弾される行いだった。精神病院に隔離されるイザリーを助けるため、アンデルスは世間に訴えた。「もし彼

が英雄だとするならば、広島という町を消したからではない。その行いに罪を感じ、《フー・モア・ヒロシマ》と世界平和を願って今も叫び続けているからなのだ」と。

忘却される罪と、償いのナショナルリズム

原爆の記憶は日本の歴史の中でも隠された歴史をもっている。ジョン・ダワー著『忘却のしかた、記憶のしかた』(岩波書店)では日本とアメリカが第二次大戦の流れの中でどのような歴史の語り方を選択してきたかが示されている。本書によれば被爆した住人は救援がされなかっただけでなく、その体験を分かち合うことすら許されなかった。厳しい検閲の中で語ることが許されなかった人々は戦後社会という現実に対応できなくなっていく。また戦時中における日米の激しい差別合戦。鬼と呼ばれるアメリカ人、猿と呼ばれる日本人。激しいプロパガンダの中で、相手が人間であることを忘れさせていく。この差別表現も戦後社会の中で忘却されていった。

敗戦国に自由はないのだろうか。戦勝国による裁判の中で、彼らは負け組であり、名誉と尊厳を奪われた国として生きるしかないのだろうか。カール・ヤスパース著『われわれの戦争責任について』(ちくま学芸文庫)は、敗戦直後のドイツ人に向けて、罪と償いのあり方を示している。それは占領軍への抵抗でも、迎合でもなかった。戦争というパワーゲームに負け、しかし敗北しても尚自分たちは生き残ろうとする選択に、新しい国の在り方が宿ることを示した。敗戦と向き合い自分たちの弱さと不自由を直視した時、他者への寛容さが立ち現れる。ヤスパースの指摘は、敗戦国だけでなく、罪を意識する人々へ、尊厳の取り戻し方を投げかけてくれる。(きもの)

編集後記

『綴葉』を読んでくださっているみなさま、はじめまして。今号から編集委員に加わりました、ミセと申します。専門はまだはっきりとは決まっていますが、ヨーロッパにおける愛の思想に興味があります。

春は出会いの季節、なんてことがよく言われますが、その「出会いの季節」につきものなのは……そう、自己紹介です。そのさい、名刺代わりといわんばかりに、往々にしてじぶんの専門を紹介することになります。でも、いざ説明しようとする、自己と専門とをつなぐもの——つまり、なぜ、じぶんはそれに興味があるのかについて語るのはとても難しいことだと気づきます。そして、たどたどしくも目の前のひとに伝える言葉をつくりあげたとき、はじめて見えてくるわたしというものがあることにも気づきます。

本を読み、書評を書くということは、その本とだけでなくじぶん自身との出逢いでもあるのだらうな、と思います。わたしの目を通して見えた本のすがた、これが読者のみなさまとなんらかの出逢いを果たしてくれるなら、これにまさるよろこびはありません。どうぞよろしくお願いいたします。(ミセ)

当てよう！ 図書カード

今号の特集は「恋愛」でしたが、ここでは学者の愛欲にまつわるクイズを一問。後世、四つん這いになって女性に馬乗りになれる逸話がつくれ、数多くの美術作品のモチーフにもなってしまった哲学者は誰でしょうか。

1. アリストテレス
2. シノベのディオゲネス
3. エピクロス
4. ルキウス・アンナエウス・セネカ
(霊人)

《応募方法》読者カードに答えを書いて生協のひとことポストに入れてください（または e-mail: teiyo@s-coop.net）。正解者の中から抽選で 5 名の方に図書カードを進呈いたします。締切りは 6 月 15 日です。

1・2 月号の解答

1・2 月号「京都の神社で最も初詣の人出が多いのは？」の解答は、3. 八坂神社でした。伏見稲荷大社は圧倒的ですが、八坂神社もかなりの人出のようですね。応募者 16 名中 14 名の方が正解でした。図書カードの当選者は、frombelow さん、自転車さん、名前忘れたさん、よっさんさん、なすさん（順不同）です。おめでとうございます。(ういろう)

読者がらひゅう

僕は賑わいに圧倒されっぱなしでしたが、春の忙しさも落ち着いてきた頃でしょうか。毎号多くの読者カードを頂けることが、編集委員の励みになっています。

○毎回楽しみにしています。新入生の読者が増えるといいですね！ (I・Sosa)

——ありがとうございます。年齢も離れてきて大変ですが、新入生に毎号手にとってもらえるような誌面づくりを頑張っています！

○大学生の読書時間が 0 時間という記事を見かけた。生協からももっと「読もうー」を広げてほしい。(職員・よっさん)

——暇とお金に余裕も無く、他に楽しみが多い中で、本を読むのは大変だろうと思います。せめて何を読めばいいか迷っている方のお手伝いのできる冊子になりたいものです。

○春、別れの季節を感じます。同期の卒業を見送るのは寂しいです。(理・トムズ)

——本当にそうですね。綴葉も二人の編集委員が卒業し、春は別れの季節であることを痛感しています。それでも、新たな編集委員を迎え、心機一転、今後より良い書評を提供できるように頑張ってまいります。綴葉の新風にも期待してください。(トロ)